

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19402030

研究課題名（和文）近世村落社会における市場経済化と地域環境の制御・共生-日本と英国の
対比研究-研究課題名（英文）The control and symbiosis of the regional environment in early modern
society: a parallel and contrast study of two rural societies, one
in England and one in Japan

研究代表者 高橋 基泰（TAKAHASHI MOTOYASU）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：70271850

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世期の「環境共生型の市場経済化」について、英国（ケンブリッジ州）と日本（信州上田小県郡）の村落社会を事例に、日常的生業活動の構造変化と非日常的自然災害への対応変化を総合的に分析する。その結果、ダイナミックな市場経済の展開に対し日英の村落諸経済社会組織は共通して堅固で適応的な対応を示した。他方、凶作・洪水は深刻に影響し、村民にはやはり「飢饉」「災害」であり、彼らだけでは処理できない広域の問題での藩・政府の対応を明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：This research project has been engaged in the 'parallel and contrast' study of two rural societies, one in England and one in Japan, in the period of the formation of the market economy, in other words the early modern period. The study is based on two village societies namely Willingham, Cambs., U. K. and Kami-shiojiri, Ueda, Nagano, Japan. It comprehensively analyses, as well as contrasts and parallels, the changes in the ordinary daily productive activities and the development of the responses to extra-ordinary natural disasters such as famines and bad harvests. Work in each research field has shown that social and economic organisations revealed their communality at the everyday level and there are very similar features which unite all the different activities carried out in times of natural disaster. The famines and other disasters were severely affected the villagers and these results also reveal the responses of the landlords and governments to such overwhelming circumstances.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2008 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
年度			
総計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：近世村落社会、環境共生・制御、自然災害、市場経済化、日英対比研究

1. 研究開始当初の背景

本研究チームは、これまで、一連の<対比>研究として2つの研究を進めてきた。1つは、市場経済形成期における農村社会の諸組織とその変容に関する研究、もう1つは、耕地や共同地＝コモنزの利用にかかわる自然環境との共生構造に関する研究である。ただし、従来の環境共生に関する研究の中心は、静態的な「日常性の構造」を解明することにおかれていた。しかし、日英の歴史的事例を検討する中で、環境共生の構造が、日英の自然環境と社会的環境によって大きく異なる内容を持つこと、また非日常的な自然災害や市場経済化によっても大きな影響を受けることなどが次第に明瞭になり、本研究の取組を着想するにいたった。

上記対比分析の対象地は、英国が16～18世紀前半期の英国ケンブリッジ州ウィリングム教区周辺の沼沢地縁り農村地域であり、日本が17～19世紀の千曲川流域にある上田小県郡の養蚕農村地域である。両地域ともに、すでに本研究チームが<対比>研究を実施し、人口変動・市場経済化の構造・村落社会内諸組織等々について一定の研究成果をあげていた。とくに社会経済史情報データベースの構築および耕地・共同地利用状況の地図情動的再現により、従来不分明であった市場経済形成期の村落社会における自然環境共生構造の実態やその歴史的性格を分明にし、同時に日英両国間の環境共生構造の社会的位相を明らかにしていたのである。

2. 研究の目的

本研究は、「近世期」のイングランドと日本という二つの社会をとりあげ、村落社会が市場対応型の経済発展を進める中で自然環境とどのように共生しまた管理していたのか、その論理と実態を社会経済史的な<対比>研究として明らかにしようとするものである。ここでいう<対比>とは、それぞれの経済社会が持つ固有性をそのまま認めた上で、市場経済化のような普遍的性格の強い歴史的現象において、相互にどのような共通性・相似性・相違性をみせたのかを比較分析しようとする方法を意味する。したがって、

それぞれの歴史社会の専門家相互のコミュニケーションを不可欠の要素とする。

これまで、近世期の村落社会は自然に包摂された受動的な存在として理解されるか、その対極として自然と共生する能動的な存在として理解されてきた。市場経済化（経済史の古典的な表現を用いれば商品経済化）は、多くの場合、どちらの立場であっても、村落社会の両極分解的破壊や、共生システムの破壊者として否定的に理解されてきた。しかし、現実の歴史過程をみると、市場経済形成期にあっては村落社会が一定の共同性を発現させつつ、地域社会の保全や市場経済に対応した経済資源利用の自然共生的管理を実現しようとする場合が多かったのであり、洪水等による自然災害への対応も、そのような歴史・社会的文脈の中でなされたのであった。

本研究では、そのような近世期のいわば「環境共生型の市場経済化」について、イギリス（ケンブリッジ州）と日本（信州上田小県郡）の村落社会を事例としてとりあげ、それぞれ1世紀以上にわたる日常的な生業活動の構造変化と非日常的な自然災害への対応変化のプロセスについて総合的に分析し、<対比>する。

3. 研究の方法

本研究は、近世期のイングランドと日本という二つの社会において、特に市場経済形成期村落社会が環境共生型の市場経済化をどのように実現したのか、<対比的>手法をもって歴史分析しようとするものである。研究計画は主に自然災害を焦点にした社会経済史的データベースおよび自然環境史の大縮尺地図情動的再現データの応用と、それらと相互の関係にある実態調査・史料調査によって構成された。

(1) 基本姿勢

本研究計画は申請者が従事してきた対比研究の発展として、対象同士の歴史的独自性を認めた上で共通性・相違性・相似性をうかがうという基本姿勢にたつ。

(2) 分析技法

本研究のとり分析技法の基本は社会経済史的なものである。もっともすでに本共同研究チームによる<対比>研究の実績が、同根ながらも分析視角・方法においてまったく異なる2つの研究として存在していた。そして、本研究はその2つの研究を高次に統合する。そのために、本研究計画は基本としては文書を解読しつきあわせる伝統的方法をとるが、同時に以下の独自の分析新技術を用いた。

①日英村落高次統合型データベース：従来の研究成果でもある日英の社会経済史情報データベース（宗門改帳 DB、史料画像 DB、遺言書 DB 等）と土地利用データベースとを有効に融合し、現在整理中の新たな日英村落史料群をも加えつつ新たな高次統合データベースを作成している。

②GIS を利用して地域空間の社会的・自然環境的な構造再現：大型高精能スキャナを用いて入力された空中写真を、GIS ソフトウェアとデジタル写真測量関連モジュールを含むリモートセンシング解析ソフトウェアをもって、大量画像データ処理をおこなった。

③自然社会環境の現地実地調査：制度的に歴史文献史料に現れない自然社会環境情報を、実地調査により収集した。

4. 研究成果

本研究によって、これまでのところ、以下のような成果を確認することができた。言うまでもないが、個々具体的な事例についての研究成果は下記多数の発表著作・論文・国内外学会報告に体现されている。

(1) 近世期環境共生型の市場経済化

日英の洪水・凶作データを用い、洪水と生活構造との関連で立体的観察をおこない、市場経済化期の凶作・飢饉時における日英村落社会を対比したところ、市場経済形成期において、ダイナミックな市場経済の展開に対して日英の村落諸经济社会組織が共通して予想以上に堅固で適応的な対応を示すことを明らかにした。

従来の環境共生に関する研究の中心は、静態的な「日常性の構造」を解明することにおかれていた。しかし、日英村落の歴史的事例を検討する中で、環境共生の構造が、非日常的な自然災害によって新たな側面をあらわすことも史実として把握できることが確認された。

とくに、市場経済形成期にあつては村落社会が一定の共同性を発現させつつ、地域社会の保全や市場経済に対応した経済資源利用の自然共生的管理を実現しようとする場合が多かったことがわかった。洪水や凶作等による自然災害への対応も、そのような歴史・社会的文脈の中でなされたのであった。

(2) 「飢饉」「凶作」の社会経済史的意味

他方、凶作・洪水は深刻な影響をもたらすがゆえに、村民にとってはやはり「飢饉」「災害」なのであり、彼らだけでは処理できない広域の問題では藩・政府の対応を明らかにしている。とくに水防という観点からすれば近世期においては日本および欧州農民は基本的に村落ないし地域単位で氾濫を前提に日々の生活体系を築いていた事、それが治水という観点からの国家政策とは近代に至るまでまったく異なる次元にあったという共

通認識にたどりついているのである。

(3) 自然災害古文書分析結果の地図重層表現の成功

主として日本の上塩尻の事例において古文書分析による洪水・飢饉データの深化に加えて自然災害の歴史分析の基礎である大縮尺の地図データの応用として、洪水と生活構造との関連で立体的観察をおこない土地保有との相関関係を重層的に表現することに成功した。

(4) 新史料・データの発見

対比研究の英国の対象であるケンブリッジ州ウィリンガム教区および近辺における洪水および干拓データ生成のための現地調査と、ケンブリッジ州公文書館における史料調査により、現地研究者にも未知・未利用であった耕地利用・生産関係・干拓の新史料・新データを見出した。

(5) 今後の展望：対比研究の可能性

本研究は、それぞれの歴史社会の専門家相互のコミュニケーションを不可欠の要素とするために、研究成果の国際的公表は重要な要素である。そのため、下記国際学会での報告は必須であった。その結果わかったこととして、国際社会では、日本の村落社会の歴史については、「イエ」のあり方ひとつでも庶民レベルでの理解は十分ではない。本研究プロジェクトが環境共生および制御をテーマにしながらも、その土台となる事柄も含め、ヨーロッパの歴史的文脈理解を前提に双方向的になされ、現地研究者との議論も十分生産的・創造的になしうることを示し西欧諸国との比較可能性を拓いたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

①山内太、近世村落と個別土地所有、日本村落研究学会『村落社会研究』、28、13-27 頁、2008 年(査読有)

②Motoyasu Takahashi, Family Continuity in England and Japan, *Continuity & Change*, 22/2 (2007, Aug.), pp.193-214 (査読有)

③高橋基泰、共同墓地から見た近世・近代期イギリス教区・コミュニティ・住民自治-日本の事例との比較を前提に-」コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』、第 6 号、2007 年、55-76 頁(査読有)

④Motoyasu Takahashi, A 'Parallel and Contrast' Study of English and Japanese Village Histories: Features of Family Continuity', 国際比較研究会編『国際比較研究』第 3 号、2007 年、80-108 頁(査読有)

⑤中澤雄太・村山良之、農村部における住宅復興過程-2003 年宮城県北部の地震-、『季刊

地理学』59、71-86頁、2007年(査読有)
⑥長谷部弘、大区小区制下の村、コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』6号、33-53頁(査読有)、2007

〔学会発表〕(計28件)

- ①山内太「資金融通からみた同族」日本村落研究学会第57回大会、2009年11月1日、(単独)於京都府綾部市ホテル広子園(京都スポーツガーデン)
- ②長谷部弘「同族団における共同性の構造」日本村落研究学会第57回大会、2009年11月1日、(単独)於京都府綾部市ホテル広子園(京都スポーツガーデン)
- ③高橋基泰「世代継承・相続における同族の機能・役割」日本村落研究学会第57回大会、2009年11月1日、(単独)於京都府綾部市ホテル広子園(京都スポーツガーデン)
- ④Motoyasu Takahashi, Introduction for the session: A 'Parallel and Contrast' study of Natural Environment and Resources Use in the Early Modern Villages: the commons and communities in Japanese and English rural societies, 1590-1870、第15回世界経済史会議(the World Economic History Congress)、2009年8月4日、セッション組織者、(単独)於ユトレヒト大学(オランダ・ユトレヒト)
- ⑤Motoyasu Takahashi, Kin relationships and families in Kami-shiojiri village, Ueda, Nagano, Japan in the Tenpo bad harvest period (1830's): for the contrast and parallel study with Willingham, Cambs., UK、第15回世界経済史会議、2009年8月4日、(単独)於ユトレヒト大学(オランダ・ユトレヒト)
- ⑥Yoshiyuki Murayama, The lean harvest in the Ueda domain of central Japan in the Tenpo period (1830s) - Hazards and geographical features、第15回世界経済史会議、2009年8月4日、(単独)於ユトレヒト大学(オランダ・ユトレヒト)
- ⑦Futoishi Yamauchi, The bad harvest of Tenpo and land holding in kami-shiojiri village in the Ueda domain of central Japan、第15回世界経済史会議、2009年8月4日、(単独)於ユトレヒト大学(オランダ・ユトレヒト)
- ⑧Hiroshi Hasebe, What was the sustainable condition of the Kami-Shiojiri People in the bad harvest of Tonpo Period?、第15回世界経済史会議、2009年8月4日、(単独)於ユトレヒト大学(オランダ・ユトレヒト)
- ⑨Kohki Iwama, The provisions against bad harvest in Kami-shiojiri village, Ueda, Shinano, Japan: A case study of the

Eizoku-ko after bad harvest in the 1830's、第15回世界経済史会議、2009年8月4日、(単独)於ユトレヒト大学(オランダ・ユトレヒト)

- ⑩Motoyasu Takahashi, Family Name and Family Continuity: in the context of Kin Relationships in Kami-shiojiri, Nagano, Japan、2008/9年ケンブリッジ大学地理学部人口と社会構造の歴史研究グループ国際セミナー(HP SS Seminars Lent Term 2008/9 The Cambridge Group for the History of Population and Social Structure)、2009年2月16日、(単独)於ケンブリッジ大学(イギリス・ケンブリッジ)
- ⑪Yoshiyuki Murayama, Geographical Setting of Kami-shiojiri, Ueda, Nagano, Japan、2008/9年ケンブリッジ大学地理学部人口と社会構造の歴史研究グループ国際セミナー、2009年2月16日、(単独)於ケンブリッジ大学(イギリス・ケンブリッジ)
- ⑫高橋基泰「市場経済形成期の村落社会と地域環境の制御・共生-水害・治水・灌漑に関する日英対比研究-問題提起」2008年度社会経済史学会研究大会パネル・ディスカッション、2008年9月28日、組織者(単独)於広島大学法学部経済学部(東広島市)
- ⑬高橋基泰「市場経済形成期の村落社会と地域環境の制御・共生【イギリスの事例】ケンブリッジ州ウィリンガム教区およびその周辺地域」2008年度社会経済史学会研究大会パネル・ディスカッション、2008年9月28日、(単独)於広島大学法学部経済学部
- ⑭村山良之「市場経済形成期の村落社会と地域環境の制御・共生【日本の事例】旧上田藩上塩尻村〔上塩尻の地理的枠組み〕」2008年度社会経済史学会研究大会パネル・ディスカッション、2008年9月28日、(単独)於広島大学法学部経済学部(東広島市)
- ⑮長谷部弘「市場経済形成期の村落社会と地域環境の制御・共生【日本の事例】〔治水をめぐる藩と村〕—千曲川、川除普請を事例として—」2008年度社会経済史学会研究大会パネル・ディスカッション、2008年9月28日、(単独)於広島大学法学部経済学部
- ⑯山内太「市場経済形成期の村落社会と地域環境の制御・共生【日本の事例】水害と土地所有」2008年度社会経済史学会研究大会パネル・ディスカッション、2008年9月28日、(単独)於広島大学法学部経済学部
- ⑰Motoyasu Takahashi, Japanese and English Rural Societies: Introduction、第12回世界農村社会学会議(World Congress of Rural Sociology XII)、2008年7月7日、セッション組織者、(単独)KINTEX Center(韓国・高陽市)
- ⑱Motoyasu Takahashi, Basic demographic data from the Shumon Aratame-cho o

f Kami-shiojiri village, Ueda, Nagano、第12回世界農村社会学会議、2008年7月7日、(単独) KINTEX Center

⑱ Yoshiyuki Murayama, The Geographical Setting of Kami-shiojiri, Ueda, Nagano, Japan、第12回世界農村社会学会議、2008年7月7日、(単独) KINTEX Center

⑲ Futoshi Yamauchi, Arable Land Use Change in the Early Modern Japanese Village、第12回世界農村社会学会議、2008年7月7日、(単独) KINTEX Center

⑳ Hiroshi Hasebe, Rural Resources Management during the Tempou-Famine in Tokugawa Japan第12回世界農村社会学会議、2008年7月7日、(単独) KINTEX Center

㉑ Kohki Iwama, Provisions against Famine in Japanese Rural Communities、第12回世界農村社会学会議、2008年7月7日、(単独) KINTEX Center

㉒ Motoyasu Takahashi, Family Continuity in Japan, in comparison with England、第7回ヨーロッパ社会科学史学会(European Social Science History Conference 2008)、2008年2月27日、セッション組織者、(単独) リスボン大学 (ポルトガル・リスボン)

㉓ Yoshiyuki Murayama, Geographical setting and landownerships of Kami-shiojiri、第7回ヨーロッパ社会科学史学会(European Social Science History Conference 2008)、2008年2月27日、(単独) リスボン大学 (ポルトガル・リスボン)

㉔ Hiroshi Hasebe, Family succession and inheritance strategies in Tokugawa Japan、第7回ヨーロッパ社会科学史学会(European Social Science History Conference 2008)、2008年2月27日、(単独) リスボン大学 (ポルトガル・リスボン)

㉕ Futoshi Yamauchi, Concerning the various life-long social relationship connected with the ownership of land、第7回ヨーロッパ社会科学史学会(European Social Science History Conference 2008)、2008年2月27日、(単独) リスボン大学 (ポルトガル・リスボン)

㉖ 長谷部弘「近世日本の村落的共同性を再考する(テーマセッション問題提起)」日本村落研究学会第55回大会、2007年12月2日、(単独) 於鹿児島県南大隅町役場兼公民館(鹿児島県・南大隅町)

㉗ 山内太「近世村落社会における諸共同性」日本村落研究学会第55回大会、2007年12月2日、(単独) 於鹿児島県南大隅町役場兼公民館

㉘ 高橋基泰「歴史の実態としての共同性再発掘: イギリス近世経済史の視点から」日本村

落研究学会第55回大会、2007年12月2日、(単独) 於鹿児島県南大隅町役場兼公民館

〔図書〕(計7件)

① 長谷部弘、高橋基泰、山内太編著『飢饉・市場経済・村落社会—天保の凶作からみた上塩尻村—』(刀水書房、2010年、編著、5、長谷部弘 iii-xiv 頁・45-68 頁、村山良之 3-14 頁、山内太 69-97 頁、高橋基泰 15-44 頁、岩間剛城 95-115 頁、総140頁)

② 國方敬司・永野由紀子・長谷部弘編著『家の存続戦略と婚姻—日本・アジア・ヨーロッパ—』(刀水書房、2009年、編著、執筆者計13名、4番目・長谷部弘 52-70 頁、11番目・高橋基泰 179-197 頁、総229頁)

③ 長谷部弘、高橋基泰、山内太編著『近世日本の地域社会と共同性—近世上田領上塩尻村の総合研究 I—』(刀水書房、2009年、編著、5、長谷部弘 47-103 頁・124-138 頁・255-270 頁、村山良之 11-22 頁、山内太 23-46 頁・104-123 頁、高橋基泰 171-254 頁、田島昇 139-152 頁、マーティン・モリス 152-170 頁、総280頁)

④ 日本村落研究学会編『近世村落社会の共同性を再考する—日本/西欧/アジアにおける村落社会の源を求めて—』(日本村落研究学会編・年報村落社会研究44、農文協発行、2009年、長谷部弘 10-37 頁、平井進 38-73 頁、村山聡 74-113 頁、高木正朗 114-149 頁、山内太 150-183 頁、伊丹一浩 184-207 頁、高橋基泰 208-237 頁、藤井勝 pp. 238-265、総299頁)

⑤ 高橋基泰・松井隆幸・山口由等編著 国際比較研究叢書2『グローバル社会における信用と信頼のネットワーク—組織と地域—』(明石書店、2008年、編著、執筆者11名、第10章・高橋基泰 241-76 頁、総315頁)

⑥ 中村則弘・高橋基泰編著 国際比較研究叢書3『グローバル化に對抗するローカル—相互補完の可能性—』(明石書店、2008年、編著、執筆者9名、第7章・高橋基泰 194-220 頁、第8章・マーガレット・スパフォード筆 高橋基泰訳 221-236 頁、総245頁)

⑦ Motoyasu Takahashi, *English Wills in their Historical Context : 1383-1800* (Matsuyama, 2007)、pp. 1-171

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.cpm.ehime-u.ac.jp/MotoHomePage/Motohome.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 基泰 (TAKAHASHI MOTUYASU)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号: 20261480

(2) 研究分担者

村山 良之 (MURAYAMA YOSHIYUKI)
山形大学・大学院教育実践科・教授
研究者番号：10210072

長谷部 弘 (HASEBE HIROSHI)
東北大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：50164835
(H20～H21：連携研究者)

山内 太 (YAMAUCHI FUTOSHI)
京都産業大学・経済学部・教授
研究者番号：70271856
(H20～H21：連携研究者)

(3) 連携研究者

岩間 剛城 (IWAMA KOHKI)
近畿大学・経済学部・講師
研究者番号：30534854